

# 國學院大學學術情報リポジトリ

## 栃木県域における柄鏡形（敷石）住居の受容とその背景

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国史学会 公開日: 2024-05-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 塚本, 師也, Tsukamoto, Moroya メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/0002000427">https://doi.org/10.57529/0002000427</a>

## 栃木県域における柄鏡形（敷石）住居の受容とその背景

塚本師也

### I はじめに

柄鏡形（敷石）住居は、縄文時代中期終末から後期中葉にかけて、関東地方南西部、伊豆半島から中部山地、さらには関東地方北西部の山地寄りを中心に分布する。標準的なものは、突出する出入口施設（張出部）を持ち、平面形が「柄鏡」のような形状を呈し、床面に敷石が配される。一方で、敷石がないものや部分的なものもあり、平面形も円形と方形があるなど、バラエティーに富んでいる。柄鏡形（敷石）住居の研究史を繙くと、敷石という視覚的に目立った特徴があるため、特殊な施設、特殊な家屋とする見解が根強かった。しかし、事例の増加や山本暉久による体系的な研究（山本二〇〇二）等により、通常の居住施設として位置づけられるようになった。<sup>①</sup>

一方、前述したな分布域の外側においても、柄鏡形（敷石）住居が存在することが分かってきた。山本暉久によれば、北は宮城・山形県、西は岐阜県、さらには北陸地方に分布が及ぶとのことである（山本二〇〇〇）。これらの地域では、柄鏡形（敷石）住居が、他の形態の住居跡の中に客体的に存在する。筆者が、調査・研究に従事する栃木県域も、柄鏡形（敷石）住居が客体的に分布する地域である。

中期終末、関東地方南西部から中部山地（長野・山梨県域）では、平面形が円形の竪穴住居が一気に柄鏡形（敷石）住居に変質し、それまで縄文時代中期の社会を特徴付けた大規模環状集落の多くが継続を絶ち、小規模な集落が分散して存在するようになる。すなわち、中期環状集落崩壊の最終段階に、柄鏡形（敷石）住居が出現したのである。このような柄鏡形（敷石）住居出現の理由について、山本暉久は、それ以前の中期環状集落との比較から論じている（山本一九七九、二〇〇〇等）。中期環状集落から、集落構成員を結びつける強固な共同体意識を読み取る。中期後葉（加曾利E・曾利式期）には、集落規模が最大となる一方で、個別の竪穴住居跡に、石柱、石壇、埋甕、伏甕等、後に柄鏡形（敷石）住居の成立に繋がる屋内祭祀用と考えられる施設が設置される。これを共同体意識が弛緩化し、個別住居単位での屋内祭祀が発達したと考え、その延長上に柄鏡形（敷石）住居の出現を捉えた。

ところが、関東地方北東部の栃木県域で調査、研究に従事していると、中期終末に集落の断絶、分散、小規模化が起こっているという印象を受けない。もしそうした現象が起こっていないならば、山本暉久が関東地方南西部から中部山地で導き出した集落構成員全体が関わる屋外祭祀から個別住居成員による屋内祭祀への移行、共同体意識の弛緩化では、柄鏡形（敷石）住居の出現を説明できないことになる。栃木県域での柄鏡形（敷石）住居出現の背景には、別な要因を考える必要がある。

本稿では、栃木県域での柄鏡形（敷石）住居出現の背景を考えるための基礎研究として、栃木県内の中期から晩期の集落遺跡の動態と栃木県域での柄鏡形（敷石）住居の特徴を把握し、相互の関連の有無を確認する。具体的には、栃木県内の中期前葉から晩期までの拠点的集落の消長を把握し、中期終末から後期初頭期における断絶の有無を確認する。また、その前後における集落の構造変化の有無を明らかにする。次に栃木県内の柄鏡形（敷石）住居に対して、年代的位置づけ、中心地域とされる関東地方南西部との形態的特徴の比較、同時期における他形態の竪穴住居との組

成比率等を把握する。そして、栃木県域における柄鏡形（敷石）住居の出現が、関東地方南西部での集落の断絶の背景と考えられる祭祀形態や共同体意識の変質との関係で解釈できるかどうかを明らかにする。

なお、関東地方北東部地域の縄文時代の研究において、遺構や遺物の共通性から、栃木・茨城両県域を併せて扱うことが有効な場合が多い。しかし、柄鏡形（敷石）住居に関しては、茨城県域は下総方面と類似し、敷石を持たない例が多いことから、本稿では対象を栃木県域に絞ることとする。

## Ⅱ 栃木県域における大規模集落の消長

### （一）大規模集落遺跡の居住痕跡の把握

栃木県域における中期中葉以降の大規模集落と考えられる遺跡に対して、編年学的な細別型式レベルで居住痕跡の有無を確認し、表に示した（第1表）。これにより、遺跡における居住痕跡の存続を把握したいと考えているが、多くの問題を内包しており、最初にその点に触れておく。

第1表では、横軸に編年学的細別型式をとったが、現時点の編年研究レベルでの最も細かい細別ではない。小破片によって型式を認定しなければならず、細別の認定が困難な場合が多いため、特に加曾利B式以降は細別を粗くした。この表の横軸に示した土器型式が連続しても、集落遺跡での居住が継続したとは限らない。仮に、最も細別された型式が連続しても、集落での居住の継続は証明されない。一時的集落景観を追求する黒尾和久等は、我々が「大規模集落」と把握する遺跡は、小規模な集団が、断続的に何回か回帰した痕跡であるとの見解を主張し続けている（黒尾一九八八等）。一細別型式間でも、集落が断絶し、回帰すると考えている。この考え方には賛否があるが、現時点で、栃





木地域の調査事例から、この問題を議論することは困難である。第1表で細別型式の連続が示されても、集落での居住の継続が確認されたことにはならない。あくまでも、断続を視野に入れた傾向を概観するものである。

第1表には、出土した土器が図示され、第三者が検証可能な三六遺跡に限定して掲載した。しかし、表面採集等で表に示した細別型式以外の土器が確認できる場合も多い。また、時期ごとに遺跡内での土地利用の場が異なり、発掘調査地点からは限られた時期の居住痕跡しか確認できなかった場合も想定される。遺跡全体には第1表に示した以外の細別型式の居住痕跡が存在することもある。<sup>(3)</sup>遺物包含層出土の土器が報告書に掲載されていないことも多く、その遺跡に存在した全ての細別型式が把握できない場合も多い。著名な遺跡であっても、発掘調査の成果や出土した遺物が十分に公表されておらず、第1表に掲載できなかった例もある。

第1表を概観すると、称名寺式の第1段階と第2段階を欠落する遺跡が大半である。江原英は、栃木県内で称名寺式初頭の土器が出土したのは寺野東遺跡のみと指摘した(江原二〇一六)。称名寺式土器に伴って、加曾利E式系の土器(加曾利E V式)が存続することが明らかとなっている。この称名寺式期に存続する加曾利E式系統の土器は、称名寺式土器ほどその変遷の過程を明確にとらえることができない。称名寺式土器は七段階に細別されているが、同時に併存する加曾利E式系統の土器を、この七段階の細別に当てはめることは難しい。栃木県域では、称名寺式の古い段階は、ほぼ加曾利E式系統の土器のみで構成されていたことが予想される。称名寺式第1・2段階の土器の編年研究は、中期終末から後期初頭の集落の動態を考えるうえで大きな課題である。

## (二) 遺跡の存続の傾向

このように多くの問題を含んでいるが、栃木県内における縄文時代中期から晩期にかけての遺跡の存続傾向を第1

表により概観する。阿玉台Ⅰb式から晩期中葉まで、各細別型式の遺構・遺物が確認されたのは小山市寺野東遺跡のみである。<sup>(4)</sup> 称名寺式の古い段階を欠くが、同様に晩期中・後葉までほぼ各時期の細別型式が確認できた遺跡は、三輪仲町遺跡、鳴井上遺跡、萩ノ平遺跡、御霊前遺跡、藤岡神社遺跡の五遺跡を数える。阿玉台Ⅰb式から堀之内2式・加曾利B1式前後までが確認できた遺跡として、浄法寺遺跡、小鍋前遺跡、松の木遺跡、古宿遺跡、御城田遺跡の五遺跡がある。第1表では空欄が多いが、九石古宿遺跡と八剣遺跡も、出土資料を窺見するかぎり、阿玉台Ⅰb式から晩期中葉まで確認できる。一方、阿玉台Ⅰb式から加曾利E式前半までしか続かない遺跡として、片府田富士山遺跡、小佐越遺跡、石神遺跡、添野遺跡、梨木平遺跡、大志白遺跡、島田遺跡の六遺跡がある。また、加曾利E式後半以降期中葉までの遺跡として上り戸遺跡、後期初頭から前葉の遺跡として下上遺跡、後期後葉以降晩期後葉までの遺跡として刈沼遺跡がある。

以上、栃木県内でも阿玉台Ⅰb式から加曾利E式期までで完結する遺跡もある。称名寺式の古い段階の欠落の問題はあるものの、阿玉台Ⅰb式から堀之内2式・加曾利B1式もしくは阿玉台Ⅰb式から晩期中・後葉まで存続する遺跡が存在する。今回第1表に掲載した遺跡から判断すると、後二者は前者の約二倍となる。中期終末に集落が断絶する関東地方南西部とは様相が大きく異なっている。

### (三) 集落の構造

仮に、称名寺式の古い段階に集落が断絶していたとしても、栃木県域では、それ以前と以後で、同じ地点で居住を続けることが多い。次に集落構造自体の中期と後期以降での異同を確認する。

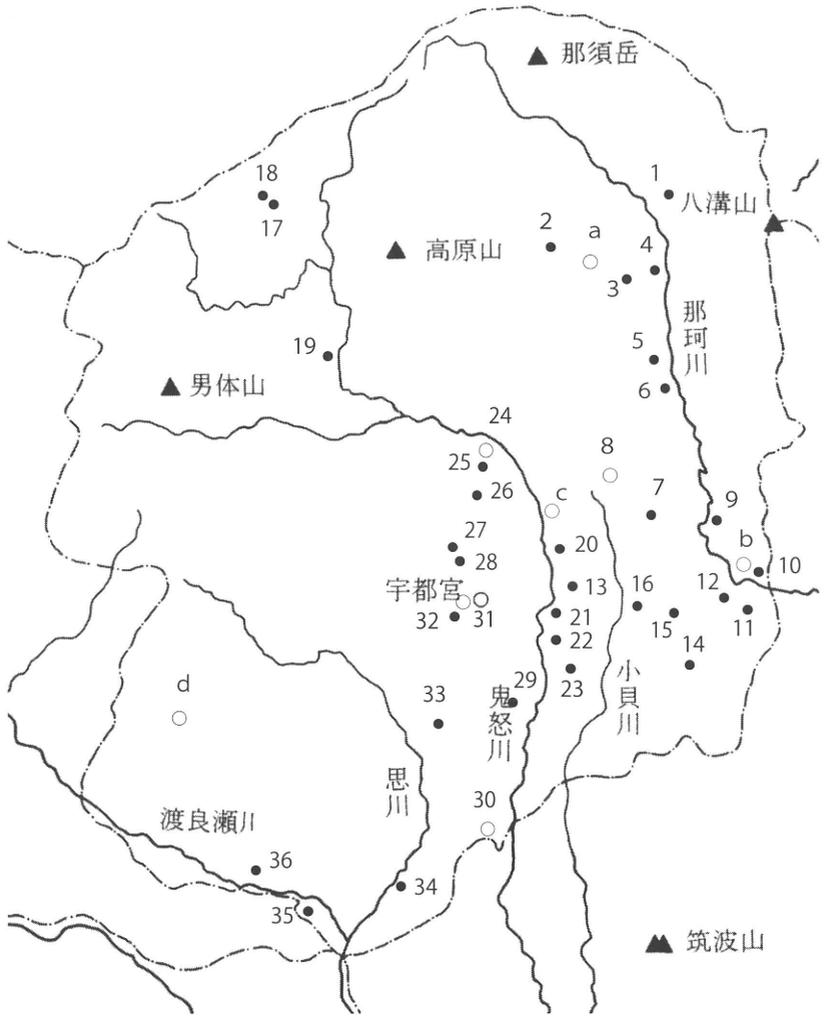
栃木県域では、中期前葉の阿玉台Ⅰb式期に、主に堅果類用の貯蔵穴と考えられる袋状土坑が出現する。阿玉台Ⅳ

式から加曾利EⅠ式期ではその数を増し、加曾利EⅡⅢ式期には円筒状へと形態変化するものが多くなるが、中期を通じて存続する。中期中葉期には竪穴住居が少なくなり、居住施設が不明となるが、加曾利EⅡⅢ式期以降は竪穴住居が明らかとなる。円筒状に形態変化した貯蔵穴は、後期初頭から後期前葉の堀之内2式期まで存続する。中期中・後葉と後期初頭・前葉では、集落の構造は大きく変化しないことが分かる。多数の貯蔵穴の存続は、堅果類の貯蔵によって越冬するという生活システムが継続したことを意味する。

### Ⅲ 栃木県域における柄鏡形（敷石）住居の様相

#### （一）研究史

柄鏡形（敷石）住居の栃木県内の研究史について、筆者は以前に触れたことがあり（塚本二〇〇七）、詳細については旧稿に譲り、ここでは概略のみを記す。一九六〇（昭和三五）年、大田原市平林真子遺跡で、栃木県内で初めて当該遺構が発掘された（第1図3）。寺田兼方等の研究により、敷石住居の時空的な位置づけがある程度把握されていた時期であり、報告者の辰巳四郎・田代寛が、主たる分布域（中部・南西関東）から離れた栃木県で唐突に見られたことを的確に認識していた（田代・辰巳一九六五）。調査例が増えるのは一九八〇年代以降であり、同時に、分布のより外縁にあたる福島県域での発見例も増えた。海老原都雄による集成的な研究（海老原一九九七）がある。後藤信祐は、槻沢遺跡の住居を分析するなかで、那須地方への西関東の諸文化の波及を念頭に置きながらも、複式炉文化圏における敷石住居の起源を、複式炉に求める見解を示した（後藤二〇〇一）。なお、栃木県を含め分布外縁部での柄鏡形（敷石）住居に関しては、山本暉久による総括的な研究があり（山本二〇〇〇）、栃木県域の事例についても年代的位



- 中～晩期の大規模集落遺跡    ○ 柄鏡形（敷石）住居を調査した遺跡
- a 平林真子遺跡    b 河原台遺跡    c 勝山遺跡    d 町屋遺跡

第1図 栃木県内の中～晩期の遺跡分布

置づけや分布の中心地域（関東地方南西部）との比較が行われている。

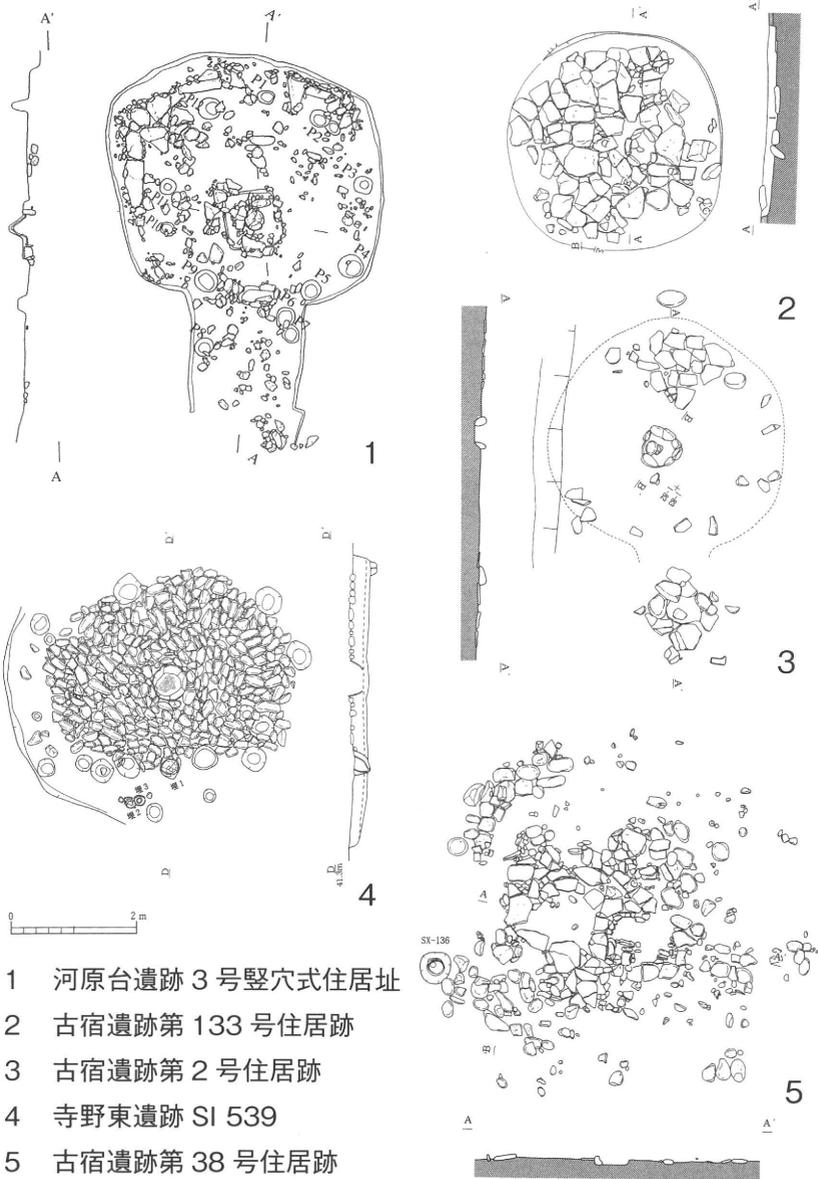
## （二）年代的位置づけ

栃木県内の中期終末から後期初頭の事例として河原台遺跡3号竪穴式住居址（第2図1）、古宿遺跡第133号住居跡（第2図2）、寺野東遺跡S-I-539（第2図4）がある。称名寺式期のものとして古宿遺跡第2・38号住居跡（第2図3・5）、平林真子遺跡W-1・2配石遺構（第3図3・4）、寺野東遺跡S-I-035・206（第5図1、第3図1）がある。荻ノ平遺跡S-I-14（第3図2）は称名寺式堀之内1式初頭と考えられる。炉周辺に部分的に敷石を配す寺野東遺跡S-X-012は堀之内1式末から2式期、古宿遺跡第34号住居跡（第5図5）、勝山遺跡3号敷石住居址（第3図6）は堀之内2式期、張出部のみ敷石を配す勝山遺跡7号敷石住居址（第3図5）も堀之内2式期である。

栃木県域における柄鏡形（敷石）住居は、後期初頭もしくは中期終末に出現し、後期前葉の堀之内2式期になると部分的に敷石を配す形態をとり、加曾利B、安行式期には柄鏡の系譜を引くとされる入り口施設を有する住居へと変化する。

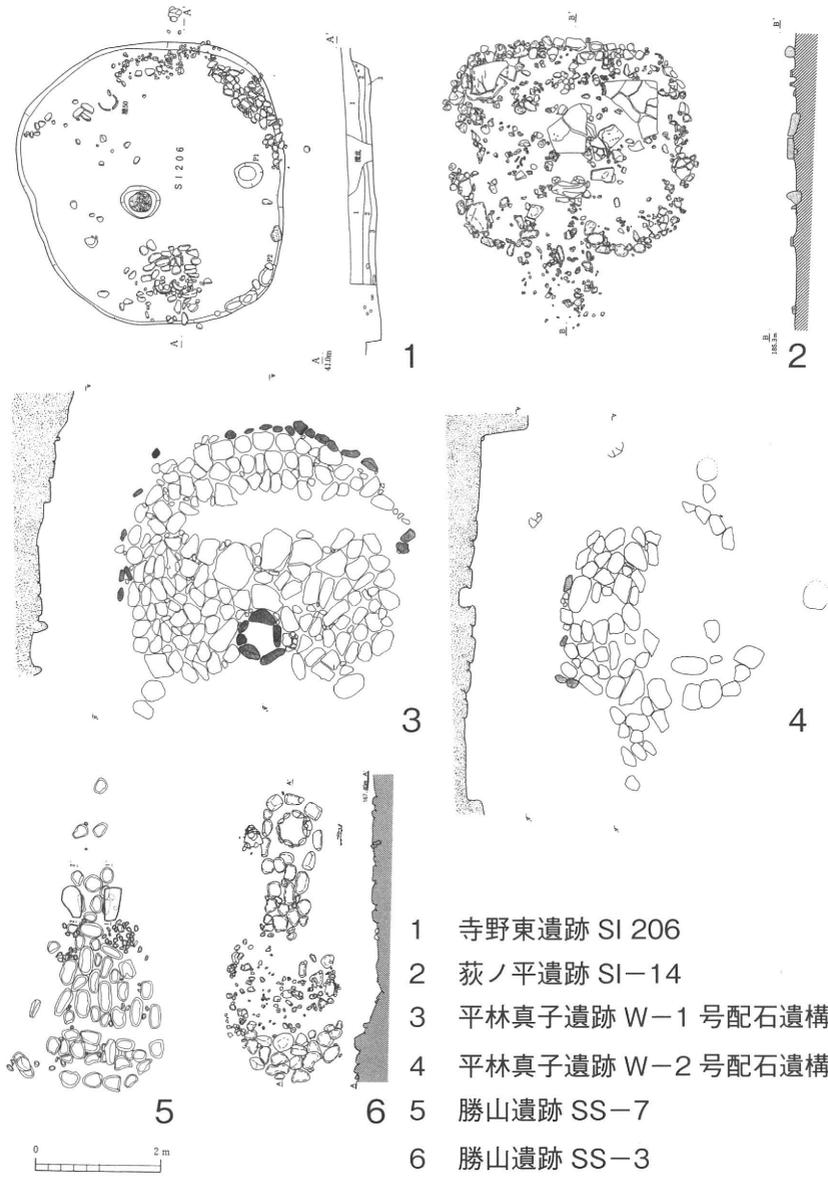
## （三）関東地方南西部との比較

山本暉久は、栃木県域の柄鏡形（敷石）住居は、分布の中心地である関東地方南西部のものと同様に類似することを指摘した（山本二〇〇〇）。ここでは、いくつかの事例を比較してこのことを確認する。しかし、栃木県域では調査例が少なく、敷石が部分的なもの、竪穴構造をとらないため全体の形状が不明なものが多く、十分な比較を行うことはできなかつた。



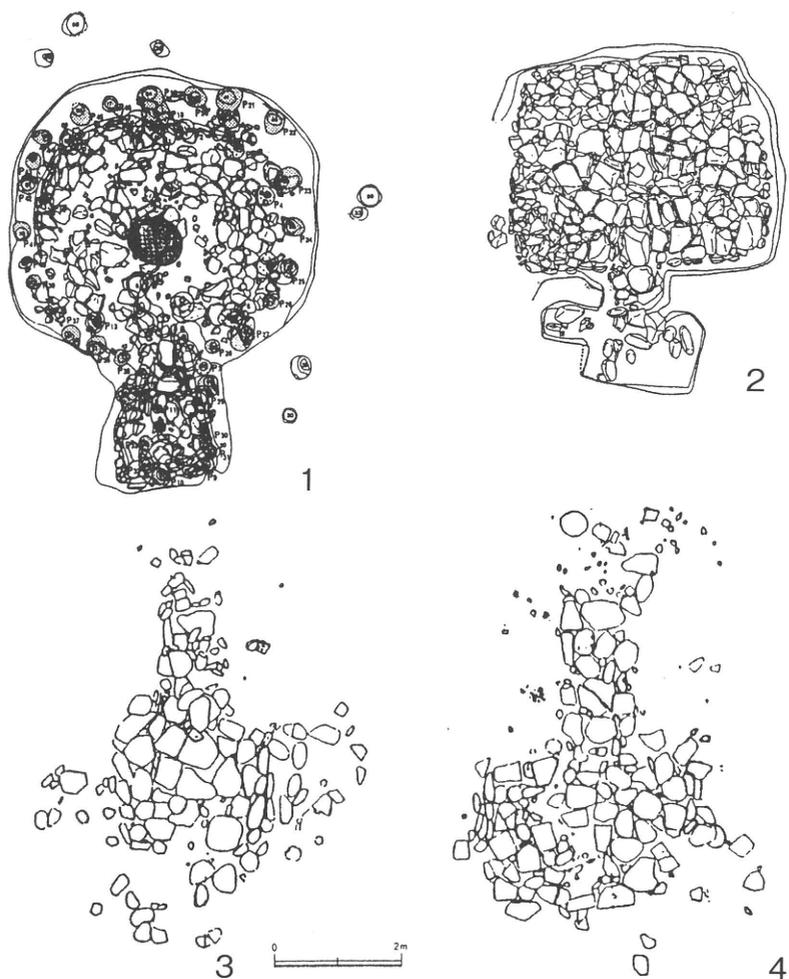
- 1 河原台遺跡 3号竪穴式住居址
- 2 古宿遺跡第133号住居跡
- 3 古宿遺跡第2号住居跡
- 4 寺野東遺跡 SI 539
- 5 古宿遺跡第38号住居跡

第2図 栃木県内の柄鏡形（敷石）住居跡（1）



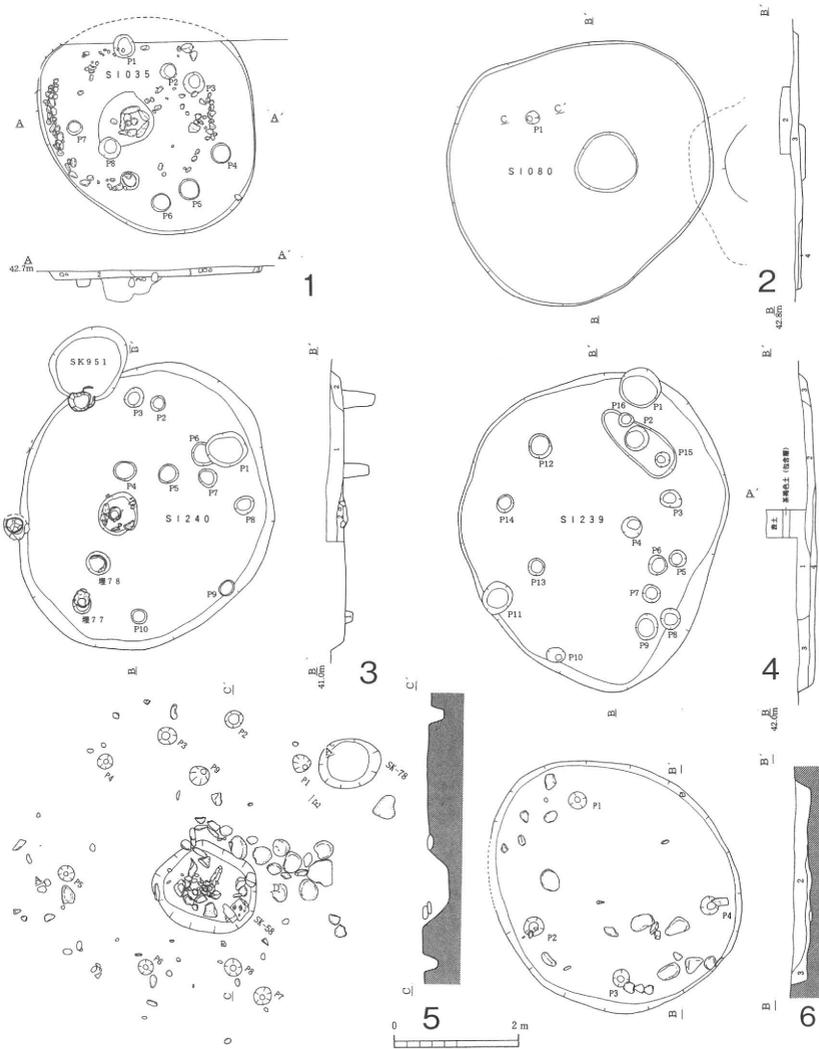
- 1 寺野東遺跡 SI 206
- 2 荻ノ平遺跡 SI-14
- 3 平林真子遺跡 W-1 号配石遺構
- 4 平林真子遺跡 W-2 号配石遺構
- 5 勝山遺跡 SS-7
- 6 勝山遺跡 SS-3

第3図 栃木県内の柄鏡形（敷石）住居跡（2）



- 1 東京都多摩ニュータウン NO.72 遺跡 18号住居跡
- 2 神奈川県馬場 A 遺跡 2号住居跡
- 3 静岡県千枚原遺跡 B1 号住居跡
- 4 同遺跡 B2 号住居跡

第4図 分布中心地域の柄鏡形（敷石）住居跡



- 1 寺野東遺跡 SI 035      2 寺野東遺跡 SI 080  
 3 寺野東遺跡 SI 240      4 寺野東遺跡 SI 239  
 5 古宿遺跡 第34号住居跡      6 古宿遺跡 第44号住居跡

第5図 栃木県域の柄鏡形（敷石）住居跡と竪穴住居跡

河原台遺跡3号竪穴式住居址（第2図1）と荻ノ平遺跡S I - 14（第3図2）は、柄鏡形を呈し、全面に近い敷石が配されている。ともに張出部を除く平面形は方形に近い。河原台遺跡と類似した事例として同じ後期初頭の東京都多摩ニュータウン No.72 遺跡18号住居跡例（第4図1）、荻ノ平遺跡と類似した事例として神奈川県馬場A遺跡2号住居跡例（第4図2）があり、関東地方南西部にも同じ形態があることが確認できる。敷石が全面に及ばないものは、平面の全体形を確認できないが、古宿遺跡第2号住居跡（第2図3）や平林真子遺跡W - 2号配石遺構（第3図4）は明らかに平面形が柄鏡形を呈す。他にも敷石を伴わない事例として、御城田遺跡第68号住居跡は柄鏡形住居跡である。栃木県域の後期初頭から前葉の敷石住居は、関東地方南西部同様に柄鏡形を基本としていたと考えられる。

堀之内2式期の事例は、勝山遺跡例（第3図5・6）や寺野東遺跡S X - 012例のように、石囲い炉周囲から張出部に直線的に敷石を配す例が多い。山本暉久はこれと関東地方南西部の「環礫方形配石遺構」や「周堤礫を有する柄鏡形敷石住居」との関連を指摘した（山本二〇〇〇）。伊豆半島の千枚原遺跡例（第4図3・4）が類似するが、他に類例は多くない。栃木県域に特徴的な形態かもしれない。

#### （四）他形態の竪穴住居跡との関係

関東地方南西部においては、前述したとおり中期終末には、集落を構成する住居形態のほとんどが柄鏡形（敷石）住居となる。栃木県域の状況を把握するために、柄鏡形（敷石）住居が調査された遺跡で、同時期の住居が複数存在する遺跡の事例を取り上げ、柄鏡形（敷石）住居の組成比率を把握する。

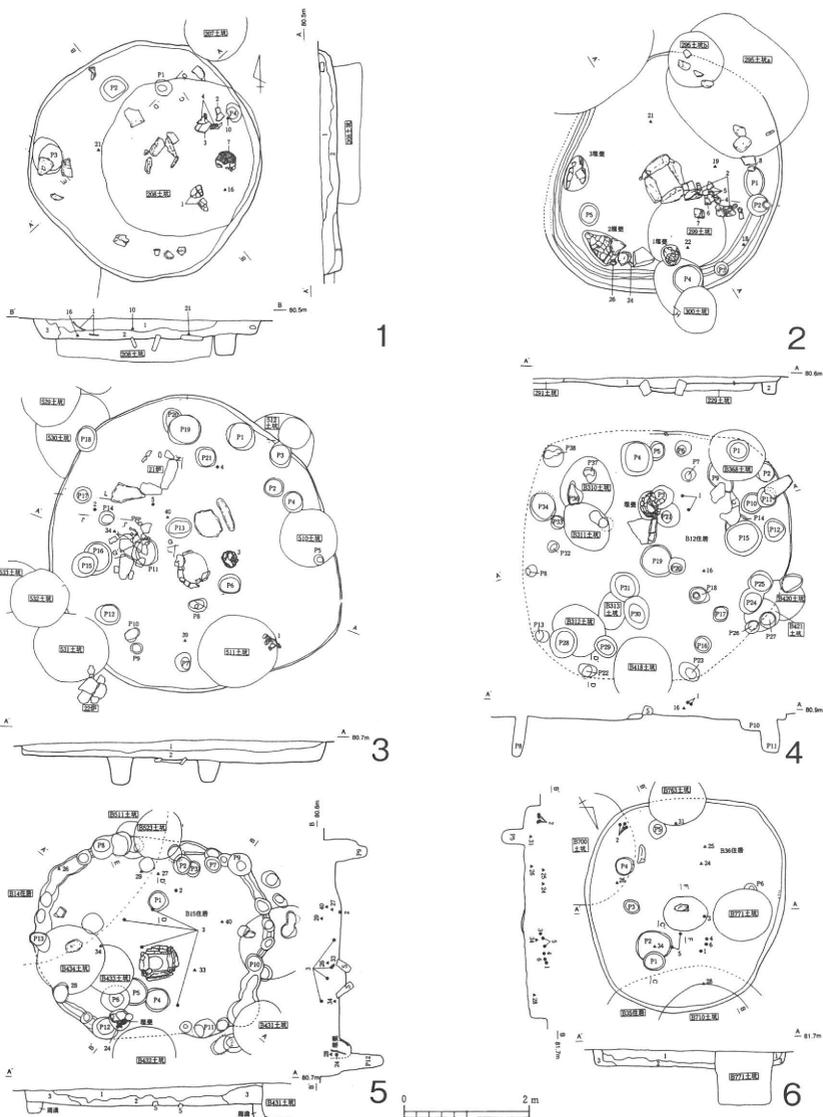
古宿遺跡は、後期に属する住居跡が十数軒調査されているが、そのうち敷石を配す住居が四軒ある。栃木県域としては高い比率である。配石遺構と報告されたなかにも柄鏡形（敷石）住居が含まれる可能性があり、全住居跡中の柄

鏡形（敷石）住居の割合は更に高いと考えられる。中期末葉から後期初頭という時間幅では、第2・38・133号住居跡（第2図2・3・5）が敷石住居で、第5・6・42・57・130が張出部と敷石の無い竪穴住居である。数のうえで大きな差はない。堀之内2式期では、第34号住居跡が炉周辺に部分敷石を持つ住居（第5図5）、第44号住居跡が、平面楕円形の敷石を配さない竪穴住居（第5図6）で、数のうえで是一对一である。同時に存在したことは検証できないが、古宿遺跡では、全住居中の柄鏡形（敷石）住居の割合が半数に近く、栃木県内の他の遺跡と比べて特異な存在であることが指摘できる。

寺野東遺跡では、中期終末から後期初頭（称名寺式期）とされる住居跡が二〇軒を越え、そのうちの三軒が柄鏡形（敷石）住居である（第2図4、第3図1、第5図1）。大半が、平面形が円形もしくは楕円形を呈し、石囲い炉もしくは地床炉を持つ竪穴住居跡である（第5図2～4）。

河原台遺跡は、那珂川の河岸段丘上に立地する。狭い調査区から、中期終末から後期初頭の柄鏡形（敷石）住居跡一軒が発見された。縄文時代中期から晩期に及ぶ大規模集落である埴平遺跡から五〇〇～七〇〇m西北西に位置する。埴平遺跡は、発掘調査が行われているものの後期初頭の住居が少なかったため、南西約三・二kmのところにある。松の木遺跡と比較する。松の木遺跡は遺跡全体の約半分を調査しているため、竪穴住居の傾向を把握するのに好都合である。松の木遺跡の報告事例による限り、後期初頭の住居跡は、柄鏡形（敷石）住居は一軒も存在せず、平面形が不整形もしくは不整形円形の竪穴住居跡で構成されている（第6図）。

以上、二遺跡一地域において、ほぼ同時期の住居跡における柄鏡形（敷石）住居の比率を検討した。栃木県南部の寺野東遺跡では、後期初頭の住居跡中約一四％が柄鏡形（敷石）住居である。栃木県中央部の古宿遺跡では、半数に近い比率で柄鏡形（敷石）住居が存在する。一方、河原台遺跡や松の木遺跡がある茨城県境、八溝山地に近い那珂川



- 1 A6 住居跡      2 A10 住居跡      3 A14 住居跡  
 4 B12 住居跡      5 B15 住居跡      6 B36 住居跡

第6図 榎の木遺跡 後期初頭 竪穴住居跡

中流域では、柄鏡形（敷石）住居の割合は極めて低いことが分かった。栃木県域において、柄鏡形（敷石）住居が、組成の主体を占めないことが確認できた。

なお、柄鏡形（敷石）住居の分布中心地域により近い寺野東遺跡より、遠隔地にある古宿遺跡で、柄鏡形（敷石）住居の割合が高い理由について、今後検討していく必要がある。ただし、柄鏡形（敷石）住居は、関東地方北西部など山地寄りに濃く分布する傾向があり、柄鏡形（敷石）住居が分布しない東関東に近い寺野東遺跡より、西寄りの山間部に近い古宿遺跡の方が、柄鏡形（敷石）住居の比率が高いのかもしれない。

#### IV 栃木県域における中期以降の集落の動態と柄鏡形（敷石）住居

第1表に示したように、栃木県域では中期終末をもって断絶する集落は少ない。大規模遺跡の半数以上は、阿玉台Ib式期に始まり、堀之内2〜加曾利B1式期もしくは晩期中・後葉まで存続すると考えられる。柄鏡形（敷石）住居は、後期初頭もしくは中期終末の事例が古く、称名寺式期の例が多く、堀之内2式期まで存続し、以後溝状の入り口施設を持つ住居形態へと変化する。栃木県域の柄鏡形（敷石）住居は、関東地方南西部の柄鏡形（敷石）住居と構造が類似している。しかし、柄鏡形（敷石）住居が、ある時期の住居形態の大半を占めることはなく、張出部や敷石を持たない竪穴住居が主流である。

栃木県域では、関東地方南西部のように集落の断絶と柄鏡形（敷石）住居出現の相関関係はみられない。中期中・後葉もそれ以後も、ほぼ同じ地点で居住が継続される場合が多い。貯蔵穴による食糧の貯蔵により越冬するという生活システムも続けられる。山本暉久が関東地方南西部で導き出したような、共同体意識の弛緩や個別住居成員による

祭祀の活発化で、栃木県域の柄鏡形（敷石）住居受容の要因を説明することはできない。

なお、栃木県域で柄鏡形（敷石）住居が作られる時期、分布主体地域からより遠い東北地方南部でも柄鏡形（敷石）住居が受容される。東北地方南部では、中期後葉には複式炉（土器埋設石囲い複式炉）が一般的な炉の形態である。その複式炉の石囲いの外側への敷石という形で敷石が始まる（鈴鹿一九八六・押山一九九〇）。栃木県でも槻沢遺跡の事例について同様のことを後藤信祐が指摘している（後藤前掲）。栃木県域で複式炉が主体的に分布するのは、北縁部のみであり、それ以南の栃木県域では、複式炉は客体的な存在であり、複式炉周辺への敷石行為も確認されていない。

## V 今後の展望

栃木県域で客体的に柄鏡形（敷石）住居を受容する背景について、関東地方西南部・中部地方とは別な理由を考へることが必要となった。後藤信祐は、槻沢遺跡における敷石住居について、複式炉文化圏における複式炉を中心とする屋内祭祀からの発展ととらえながらも、中期後半以降の連弧文土器、曾利式系土器、有孔鍔付土器、埋甕、伏甕、立石、石棒、丸石な中部・西関東から槻沢遺跡のある那須地方（栃木県北部）にもたらされたことに注意を喚起している（後藤前掲）。筆者も、柄鏡形（敷石）住居受容の背景を、中部・南西関東の文化要素受容の一環と考えたい。後藤が指摘した要素のうち、連弧文土器と曾利式系土器は土器文様という当時の人々の世界観に関することで、それ以外のものは祭祀的な遺物で、具体的な祭祀行為を伴ったことが考えられる。柄鏡形（敷石）住居は、個別住居成員による屋内祭祀とともに受容された可能性がある。食糧を堅果類に大きく依存し、貯蔵によって越冬するという中期中

葉以来の生活システムを継続する一方で、中部・西南関東的な文化要素を部分的、選択的に受容したと考えられる。そして中部・西関東由来の遺物のほとんどは、搬入品ではなく、在地で製作されている。中部・南西関東の人間がまとまって移住し、遺構・遺物を持ち込んだのではなく、あくまでも在地の人間が積極的に受容したのである。

栃木県域は、前期後半以降、古利根川の東側にある千葉・茨城県域と同調して、古利根川以西の関東地方南西部と文化、生業の面に対峙することが多い。土器では浮島式と諸磯式、阿玉台式と勝坂式、下北原式と堀之内式、生業では群集貯蔵穴（堅果類の貯蔵）と打製石斧（根茎類の採取）があげられる。しかし一方で、東側による西側の文化要素の受容もみられる。浮島式における諸磯式の浅鉢、阿玉台式における勝坂式文様要素、器台をはじめ、後藤が取り上げた諸遺物が受容されている。栃木県域における柄鏡形（敷石）住居の受容は、社会変化等の一時的な要因ではなく、伝統的な中部・南西関東の遺構・遺物の受容の一環として理解したい。

今後は、古宿遺跡のような柄鏡形（敷石）住居が大きな比率を占める遺跡と寺野東遺跡や松の木遺跡のような柄鏡形（敷石）住居の割合が低いもしくは無い遺跡との構造差の把握、関連遺物の中部・南西関東との比較、遺跡内での柄鏡形（敷石）住居と他の形態の住居との扱われ方の違いなど具体的な分析を行い、栃木県域における柄鏡形（敷石）住居受容の背景を具体的に明らかにしたい。

## 註

(1) 近年では、山本暉久による柄鏡形（敷石）住居一般家屋論を基本姿勢としながら、堀之内2式期以降の事例に特殊性を見いだす石井寛の研究等があり、特殊遺構論と一般家屋論の対立という単純な図式ではなくなっている。

(2) その一方で、中期終末期には内陸地帯で集落内に配石遺構がみられるようになる。再び集落単位での屋外祭祀が復活する。山本暉久はこれを新たな紐帯の再編・強化と捉え、後期社会への変質を説明する。

(3) 筆者が、調査・報告に携わった栃木県壬生町八剣遺跡では、北関東自動車道路線内に対し、記録保存のための発掘調査をし、第1表に示した時期の遺構や土器を確認した。しかし、それ以前に壬生町史に携わった折、地元で長年表面採集を続けてこられた内山正之氏の採集資料を実見、図化する機会があった。阿玉台I b式<sup>3</sup>・加曾利E II式の土器も多数存在し、図化したのが、紙数の関係で掲載することができなかった。八剣遺跡は、阿玉台I b式から晩期中葉までの各細別型式の土器が確認できる遺跡である。

(4) 江原英は、称名寺式を伴わず加曾利E V式で構成される称名寺式第1段階の資料として、寺野東遺跡S I 539、上り戸遺跡S K 578・579を提示している（江原二〇一六）。

(5) 栃木県域で複式炉が主体的に分布するのは、槻沢遺跡

（那須塩原市）、ハツケトンヤ遺跡（那須町）、仲内遺跡（日光市湯西川）など北縁部に限定される。

## 参考文献

- 石井 寛 一九九八「柄鏡形住居址・敷石住居址の成立と展開に関する一考察」『縄文時代』第九号、二九一―五六頁
- 江原 英 二〇一六「北関東地域の様相」『企画展「称名寺貝塚」関連シンポジウム 称名寺貝塚と称名寺式土器』横浜 市歴史博物館、九三―一四頁
- 海老原郁雄 一九九七「接圏の敷石住居」『奈和』第三五号、八七―一〇七頁
- 押山雄三 一九九〇「福島県の複式炉」『郡山市文化財研究紀要5』、一―一六頁
- 後藤信祐 二〇〇一「槻沢遺跡における竪穴住居建て替えに関する覚書―竪穴住居建て替えに伴う炉の作り替えパターン―」『研究紀要』第九号、一一―一四頁、財団法人 とちぎ生涯学習文化財団 埋蔵文化財センター
- 黒尾和久 一九八八「縄文時代中期の居住形態」『歴史評論』四五四、九―二一頁
- 鈴鹿良一 一九八六「複式炉と敷石住居」『福島の研究』、一四三―一七四頁
- 辰巳四郎・田代寛 一九六五「栃木県大田原市平林真子遺跡

発掘調査略報』大田原市教育委員会

塚本暉也 二〇〇七「第4章 縄文時代 第4節 遺構研究

1. 建物跡 (3) 敷石住居跡の研究』『研究紀要』第十五

号、一九九一—二〇〇頁、財団法人 とちぎ生涯学習文化財

団 埋蔵文化財センター

山本暉久 一九七九「石棒祭祀の変遷」『古代文化』第三一巻

一一号、一一四—頁、一二号、一一二—四頁

山本暉久 二〇〇〇「外縁部の柄鏡形(敷石)住居」『縄文時

代』第一一号、一一四—頁

山本暉久 二〇〇二『敷石住居址の研究』有限会社 六一書

房